

優秀修士論文概要

国民公会議員ル・バ

—— 人物像およびサン＝ジュストとの関係 ——

伊 藤 希

本修士論文は、フランス革命においてロベスピエール派議員として活動した革命家フィリップ・ル・バに関する詳細を提示するために執筆された論文である。

本修士論文では、二点の研究目的を掲げている。一点目の研究目的は、世界において未開拓な人物であるル・バの人物像を明らかにすることである。二点目の研究目的は、ル・バとサン＝ジュストの関係を検討することである。本修士論文では、ル・バの曾孫の夫ボル⁽¹⁾によって執筆された、ル・バに関する情報が記載されている『ル・バ史料』⁽²⁾を主たる史料として使用した。

本修士論文における本論部分は、二部構成である。本論部分第一部ではル・バの人物像を分析し、第二部ではル・バとサン＝ジュストの関係を分析した。

本論部分第一部第一章では、ル・バの生い立ちに関する情報や、ル・バがフランス革命に身を投じることになった経緯、『ル・バ史料』に掲載されているル・バの妻エリザベートによって書かれた回想録の全訳を提示した。1764年11月4日、ル・バはパ＝ド＝カレ⁽³⁾のフレヴァンに生を受けた。早くに母を亡くしたル・バは、何よりもまず、当時13人の子どもがいた貧しい家族の生活費に貢献することを考えていた、とボルは述べる⁽⁴⁾。1789年に法学士号および弁護士資格を取得したル・バは、1790年パ＝ド＝カレ県の代議員に任命される⁽⁵⁾。ル・バは、真面目な資質ゆえに革命に対する態度を明示できずにいた⁽⁶⁾。しかし、ル・バはアラスで過ごしなが、パリにおける革命運動の様子を耳にし、次第に自分がある地の様子とパリの様子の違いを顕著に実感するようになる。1792年、ル・バはパ＝ド＝カレ県の選挙で当選し⁽⁷⁾、その後、ロベスピエールの考え方に付き従っていった。また、妻エリザベートによる回想録には、ル・バが、愛する妻にしか見せなかった「人物像」に関する記述が豊富に含まれている。例えば、ル・バとエリザベートのなれ初めに関する記述は、他の資料では見受けられない記述であり、エリザベートしか知らないル・バの素顔が最も垣間見られる記述である。他の資料において、ル・

(1) Stéphane-Pol はペンネームであり、実名は Paul Coutant である。

(2) Stéphane-Pol [Paul Coutant]. (1901). *Autour de Robespierre: Le conventionnel Le Bas, d'après des documents inédits et les mémoires de sa veuve*. Ernest Flammarion. 本修士論文では、Hachette Livre-BNF によって2020年に出版された左記書籍のリプリント版を主として用いた。本稿では、上記書籍名を『ル・バ史料』、著者名をボルと示す。

(3) 県は、1790年3月4日に新設された。ル・バが出生した1764年にまだ県は存在しなかったため、厳密には、ル・バはアルトワ地方のフレヴァン出身と記載すべきである点を書き添えておく。

(4) ボル (1901)、p.2。

(5) ボル (1901)、p.13。

(6) ボル (1901)、p.23。

(7) McPhee, Peter. (2012). *Robespierre: A revolutionary life*. Yale University Press. p.131.

バはほとんどの場合、思慮深く、控えめな性格をしている⁽⁸⁾と述べられている。しかしエリザベートによる回想録からは、ル・バは茶目っ気がある一面や、惚れた女性に対して精一杯の愛を伝えようと必死になる一面を持っていたのだと読み取れる。左記のようなル・バの様子は、エリザベートしか知らないル・バの人物像であり、妻から見た夫ル・バの「現実（リアリティ）」⁽⁹⁾である。

本論部分第一部第二章では、日本語による資料から読み取れるル・バに関する情報の詳細を提示した。日本語による資料において、ル・バは主に、サン＝ジュストの親しい友人であり、革命に対する強固な意志を持ったロベスピエール派議員として述べられ、描かれている。本修士論文においては、論文や伝記のみならず、フィクション作品も有意義かつ重要な資料として扱った。なぜなら、ル・バに関する情報を含んだフランス語による資料でさえ数少ない中、ル・バが登場するフィクション作品は複数ある上に、作中でル・バのキャラクターが明確に設定されているからである。つまり、現状、ル・バの人物像はフィクション作品の中でも形成されていると言える。小説や漫画などのフィクション作品におけるル・バのキャラクターは、『ル・バ史料』で述べられているル・バに関する情報と一致する特徴を多く有している。例えば、妻エリザベートを一途に愛している点や、猛進するサン＝ジュストを側で見守り続ける点などである。なお、各フィクション作品におけるル・バのキャラクターに大きな違いは見出されなかった。

本論部分第二部第一章では、日本語による資料から読み取れるル・バとサン＝ジュストに関する情報の詳細を提示した。日本語による資料において、ル・バとサン＝ジュストは主に、互いに気心の知れた親密な友人同士として述べられ、描かれている。サン＝ジュストは、ル・バの妹アンリエットと婚約していた。つまり、ル・バとサン＝ジュストは家族ぐるみで深い関係があったのである。ゆえに、ル・バとサン＝ジュストの関係は、単に政治活動において共に過ごす時間が長かった同志というだけではなく、互いに義理の家族になりたいと思えるほどの強い絆と深い愛情で結ばれた、親友同士の「密接な関係」⁽¹⁰⁾であったと述べて良いだろう。また、ル・バとエリザベートの息子は、「少年ルイ＝ナポレオン・ボナパルト、のちの皇帝ナポレオン三世の家庭教師を七年にわたりつとめ多大な影響を与えたフィリップ・ルバである。」⁽¹¹⁾。エリザベートによって「ルバとサン＝ジュストへの敬愛の念をたえず」⁽¹²⁾語られながら育った人間が、皇帝の教育において重要な役割を担っていた点においても、ル・バとサン＝ジュストの関係は歴史的に意義があると言えよう。

本論部分第二部第二章では、『ル・バ史料』から読み取れるル・バとサン＝ジュストに関する情報の詳細を提示した。政治活動におけるル・バは、サン＝ジュストの隣で、激しい傾向にあるサン＝ジュストの気性を宥めるという役割を担っていたという⁽¹³⁾。また、エリザベートは回想録で、政治活動外におけるル・バとサン＝ジュストの内面的な関係を書き記している。加えて、ル・バがエリザベートに送っ

(8) ボル (1901)、p.53。

(9) 「現実（リアリティ）」については、小田中直樹 (2002)『歴史学ってなんだ?』株式会社 PHP 研究所、p.99を参照。

(10) マルタン、ジャン＝クレマン (2024)『ロベスピエール—創られた怪物—』(田中正人訳) 法政大学出版局 (原著は2016)、p.177。

(11) 安部住雄 (2014)「記憶の中のサン＝ジュスト」『國學院雑誌』115巻11号、p.10。

(12) 安部 (2014)、p.10。

(13) ボル (1901)、pp.236-238。

た書簡からも、ル・バとサン＝ジュストの内面的な関係を見出せる。回想録や書簡によると、1794年5月頃までのサン＝ジュストは、ル・バのみならずエリザベートやアンリエットに対しても、まるで愛情深い家族のように接していた。ゆえに、ル・バとサン＝ジュストの内面的な関係は、家族としての関係と同様であったのだと感じられる。ル・バとサン＝ジュストを繋いでいた様々な線の中で、アンリエットの存在は、両者の「家族的関係」を繋ぐとりわけ太い一本であった。ゆえにサン＝ジュストとアンリエットが破局すると、ル・バとサン＝ジュストの内面的な関係も大きな影響を受けた。1794年5月以降にル・バによって書かれた複数の書簡には、サン＝ジュストに対するル・バの感情が変化していく様が綴られている。

本論部分第二部第三章では、ロマン・ロランの戯曲 *Robespierre* (1939)⁽¹⁴⁾ におけるル・バとサン＝ジュストの関係を分析した。*Robespierre* (1939) では、ル・バが妻子よりもサン＝ジュストと運命を共にする選択を優先したと解釈できる場面や、ル・バとサン＝ジュストが互いの精神に深く触れることを許し合う、愛し合っている者同士であると解釈できる場面が描かれている。*Robespierre* (1939) は、ル・バとサン＝ジュストの関係を他のどの資料よりも濃密に描き出している。*Robespierre* (1939) はフィクション作品であるが、作品におけるル・バの言動は『ル・バ史料』におけるル・バの言動とほぼ一致している。ゆえに、*Robespierre* (1939) におけるル・バの言動やル・バとサン＝ジュストの関係は、ロランによって忠実に再現および表現された、一種の「史実」であると捉えられる。

ル・バは、日本はおろか世界でもあまり知られておらず、フランス革命研究においてもほとんど扱われない人物である。本修士論文から、ル・バに関する研究が進んでいない理由として、ル・バが元来持ち合わせている思慮深く穏やかな性格が、物事の先頭に立ち目立つ役割を担う際に必要なリーダー気質と離れている点を挙げられる。名実共に有名なサン＝ジュストとル・バを比べた場合、両者の性格は対照的である。フランス革命研究においては、リーダー気質を有していた人物の名前が輝かしく目立っている。しかしル・バもまた、性格の質の違いを生かし、サン＝ジュストがリーダーとして最大限の力を発揮できるよう、特に精神的にサポートする役割を担っていた。つまり、ル・バは、フランス革命における最大の「縁の下の力持ち」なのである。本修士論文は、世界において未開拓な人物であるル・バおよびル・バとサン＝ジュストの関係に関する研究の一葉となることはもちろん、ル・バが関わった著名な革命家に関する研究に対し、新たに考究すべき側面を与え得るだろう。

(14) Rolland, Romain. (1939). *Théâtre de la Révolution: Robespierre*. Albin Michel.

優秀修士論文概要

ポール・ゴーガン『快樂の家』に関する総合的研究

加藤 寛斗

本論文の目的は、ポール・ゴーガン (Paul Gauguin, 1848-1903) が最晩年にマルケサス諸島、ヒヴァ・オア島でのアトリエ兼住居としてデザインした『快樂の家 *Maison du Jour*』を作品として捉え、そこに反映された画家の思想と、この時期に至るまでの画家の意識の変遷を明らかにすることである。

第一章では、まず第一節で、画家とフランスにおいてその周囲にいた人々との関係性について、時代ごとに整理した。第二節では、画家が南仏アルルで生活を共にしたフィンセント・ファン・ゴッホ (Vincent van Gogh, 1853-1890) と共有した観念について扱った。まず、ゴッホが弟テオに宛てた書簡の中で、アルルへやって来るゴーガンのことを「新しい詩人」と呼び、画家のために『詩人の庭』の連作を描いたことを確認した。ゴッホは南仏というトポスに特別な価値を付与し、そこに自分や他の芸術家の未来をみていたが、その未来を実現するのは、アトリエでの共同生活をはじめとした自分たちの新たな芸術的活動であり、印象主義を背景に持つその「新しさ」は、全く同時に「復活」のイメージを纏うものなのであった。次に、ゴッホの自分の内面的な在り方を表現するために色彩を用いるという志向が、ゴーガンと共有されるものであることを確認した。そして、両画家の歩みにおいて、ドラクロワという先人の存在が強く意識されていたことを明らかにした。

第三節では、まずゴーガンにとっても「詩人」という言葉が特別な意味を持つものであったことを確認した後で、ボードレールの美術批評をコーパスに加え、ゴーガンにおける色彩、内面性、ドラクロワという先人への意識について更なる分析を試みた。『1846年のサロン』の中で、ボードレールはドラクロワを「絵画における詩人」とし、かれの、描く対象を前にして、それを模倣したりそのまま表現したりするのではなく、そこに別なものを現出せしめようとする精神の在り方を論じた。それは半ば非意識的なものであり、画家の「気質」に多くを負っている。次に、ボードレールの「色彩による素描」と言うべき観念が、ゴーガンにそのまま用いられていることを証明しつつ、ゴーガンが『偶感抄』の中でドラクロワの振る舞いを「反抗」として取り上げていることに注目した。その上で、ドラクロワの『日記』にみられる精神的な闘争のテーマを確認し、そこには生涯に亘って「強く fort」あることにこだわったゴーガンと通底する一種の男性性への強迫観念がみられることを指摘した。続いて、ドラクロワの『日記』と同様に、ボードレールの批評においても、「想像力」という言葉が重要な意味を帯びていることを確認し、ボードレールにおいて「想像力」を持った画家による作品が「詩」として捉えられていたことをみた。

次に、ゴーガン自身の「闘い」について分析をした。自意識に関わる画家の言葉は、様々な価値観に苛まれる自分と、そうしたものを取り払って自分の決めた道を「強く fort」突き進もうとする自分との対立という軸で考えることが出来る。また、画家は絵画史における自分の振る舞いを次の世代のための闘争と捉えていた。それは、自然の研究を「印象派」よりも更に進めること、つまり、目に映る風景の

表現を追求するのではなく、思考によってそれを探求するということによって実現される。そして、『偶感抄』の中に画家が紛れ込ませたドラクロワからの引用を考慮に入れるとき、画家が明示しているより以上に大きな影を落とすこの先人の存在が裏付けられる。画家としての自身の「闘い」が問題になるとき、画家は理論だけでなく、実際にかれの時代の中でそれに身を投じたドラクロワの存在そのものを強く意識していたと考えられるのである。

続いて、ボードレールのドラクロワ論とゴーガンのテキストにおいて、絵画史の「鎖」の中の「輪」という観念が共有されていることを明らかにした。最後に、「野蛮」というテーマでゴーガンのドラクロワに対する言及とボードレールのドラクロワ論を結ぶことを試み、次のような結論を得た。「詩人として描く画家」という意味合いにおいて、そして「野蛮」な素質を持った絵画における革新者という意味合いにおいて、ゴーガンはボードレールの提示するドラクロワ像を自意識に多く転用している。しかしドラクロワが「社交性」の中に「野蛮」を埋没させたのに対し、ゴーガンは「孤独」の中に「野蛮」を回復させようとする。この意味で、ゴーガンの歩みは、ドラクロワにおいて他の諸要素に覆い隠されていたものを全面的に推し進めていく決意であると言えるのである。

第二章では、画家と「他者」との関わり方を、性の間の差異、人間と動物の間の差異に注目しながら捉え直すことで、画家の自意識の在り方に深く迫ると共に、画家が読者であったバルザックから引き受けた諸観念の、作品などにおける表れについて分析した。第一節では、まず『ノアノア』における両性具有への言及箇所について検討し、ゴーガンがタヒチにおいて両性具有へと近付いていくとき、「強さ」と「弱さ」とが、もはやその対立が意味をなさないほどに画家の中で混ざり合い、その運動が画家を包み込むと同時に画家の内部でも進行するという事態について明らかにした。次に、画家が現地の生活の中で「未知の幼年期」へと遡っていることを自覚するという、そして相手の示す特徴に包み込まれ、そこに入り込んでいくことによって、自分自身の内的な変性をみるというメカニズムについて明らかにした。

続いて、「動物性」や「両性具有」への混融というテーマの、造形芸術における表れについて分析した。主な対象としたのは絵画作品『波の中で(オンディーヌ)』と彫刻作品『オヴィリ』である。『オンディーヌ』については、それはいかなる現実の女性の生活や存在に対して動物的であるという見方を付与したものでなく、まさに「動物性」との一体化が成し遂げられるような場所へと進んで入り込んでいく主体の象徴的表現であるということを確認した。『オヴィリ』については、そこに昇天のテーマが含まれていることと、ここでは諸要素が一つの形態へとまとめ上げられ、それらが融合しているがゆえの神秘性と象徴性を獲得しているということについて確認した。その後、バルザックの『人間喜劇 総序』の一節を引用し、バルザックがジョフロワ・サン＝ティレールから援用した「形成の統一性」の概念が、ゴーガンの目にも魅力的に映ったであろうと結論付けた。

第二節では、画家がバルザック『神秘の書』から引き受けた諸観念について検討した。まず、『前後録』に登場するセラフィトゥス・セラフィタというモチーフを取り上げ、当該箇所で使用されている単語をジャック＝アントワヌ・ムーレンハウト『太平洋島嶼紀行』と対照しつつ、ゴーガンにおいて神話上の男女二元論がバルザックの小説に重ねられたことをみた。続いて、ゴーガンにおける愛のテーマには、こうした男女二元論的なものに加え、彼方から届くメッセージという意味合いのものがあることを指摘した。

その後、『神秘の書』の検討に入った。まず『追放された者たち』について、画家が見たという「夢」

を、本作と結び付けて考察した。次に、『ルイ・ランベール』について、本作の核心に位置付けられる「自己完成能力」が画家の「野蛮性」に対する態度と通底することを指摘し、また、本作に登場する「《特殊性 Spécialité》」という観念が、画家の『われわれはどこから来たのか われわれは何者か われわれはどこへ行くのか』のテーマに繋がっているという点について分析した。最後に、『セラフィタ』について、地上と天上を垂直に結ぶ本作のテーマが、『われわれ』における上昇のモーメントと結び付くことを指摘した。

第三章では、ゴーガンにおける宗教的な要素について、バルザックに続いてミルトンやエドゥアール・シュレ、ジェラルド・マッシーといったゴーガンの参照源を分析しながら明らかにしていくと共に、『快樂の家』に「住まう」という形態に注目しながら、最晩年の画家における諸観念と振る舞いについて考察した。第一節では、まず『快樂の家』についての情報を整理した。次に、タヒチにおいて画家が「静寂」と「孤独」を、そしてその中で「楽しみ」を追求した様子を、画家によるヴェルレーヌの詩の引用を参照しながら確認し、『快樂の家』が、画家による「楽しみ」の追求の究極の形態であることを明らかにした。

次いで、『快樂の家』のデザインに視点を移し、そこに設置された梯子が、ミルトンにおける「自然の階梯」のモチーフをはじめとして様々な観念に接続され得るものであり、善と悪の間に漂う存在としての人間の在り方を象徴していることを示唆した。そして、そうした生における在り方を通して、その彼方に、「静寂」と「ニルヴァーナ」が眼差されていたことを示した。

最後に、『前後録』などのテキストにおける、画家の反逆者＝指導者としての自己イメージの演出を確認し、アルベール・オーリエ『絵画における象徴主義』を引用しながら、画家における「装飾」と「装い」の在り方を検討し、次の結論を得た。画家の「楽しみ」の追求は、パリではなく、タヒチにおける画家の「孤独」と結び付くものであり、『快樂の家』は、タヒチの人々と画家が混じり合い、一体化するための演劇空間なのだ。「神の地」という舞台上、画家は文章において、造形芸術において、そして生活において、様々な観念やイメージと関わり合い、ときに飛躍的な仕方で、それらを演技する。しかもそれは、ゴーガンの「闘い」の最後の局面として、近い未来における自身の不在を前提として行われたのである。画家は、己の「夢」を表現し、追い続けることによって、自分とは全く違う道を進む次の世代の画家たちに、取り換えることの出来ない「輪」を渡したのだ。

優秀修士論文概要

ドーノワ夫人の作品における動物について

永安由奈

本論は、従来象徴的な側面から論じられてきたドーノワ夫人の妖精物語における動物表象を、同時代の社会と関連付けて捉え直すことを目的とした。

第1章では、まずドーノワ夫人の生涯と創作活動を概観した。彼女は若年期には不遇の時期を経験したが、その晩年には作家として成功を収めた。また王侯への出版物の献呈やサロンを通じて特権階級の人々と交流するに至ったが、こうした周囲の環境はドーノワ夫人の創作に一定の影響を与えたと考えられる。続いて『妖精物語』および『妖精物語または当世風の妖精』の構造を確認し、作品全体におけるコントの位置付けを示したのち、研究史と出版史を整理した。出版史については、フランスにおける出版歴を18世紀から現代にかけて概観し、さらに日本語訳については入手可能な資料を中心に調査し、日本におけるドーノワ夫人受容の歴史と現状を明らかにした。研究史に関しては、20世紀以降の研究を中心に概観した。その中でも1928年のStorerの研究は、ドーノワ夫人の作品における動物の重要性を指摘し、またそれらを「援助者」と「変身した主人公」に分類し、その後の研究にも影響を与えた。また近年のJasminの研究は、ドーノワ夫人の作品を同時代の社会的文脈に位置付け、ラ・フォンテーヌやペローの作品との間テクスト性にも注目している。日本では、藤原真実が17世紀から18世紀の妖精物語と同時代の宮廷との関係性に着目し、さらなる研究の必要性を指摘している。これらの研究はいずれもドーノワ夫人の作品理解に重要な視点を示しており、とりわけJasminと藤原の研究は同時代社会との関係の重要性を示している。従来の研究では、ドーノワ夫人の動物の作品内での象徴性や機能に注目する一方で、社会背景との結びつきを示したものは少なかった。たとえば、ヴェルサイユにおける王立動物園の存在や、宮廷女性が生活を共にした愛玩動物、さらにはデカルトの動物機械論とそれに対する反論のような思想的文脈は、ドーノワ夫人の創作と時代を共有していたにもかかわらず、その作品と積極的に関連づけられることは少ない。そこで第1章の結びとして彼女の動物表象を、寓意性や物語の内部機能としてのみならず同時代の思想および文化を反映する表象として捉える視点を本研究の課題として提示した。

第2章では、17世紀後半のフランス宮廷における動物とその周辺について確認し、ドーノワ夫人の創作の背景となった状況を明らかにした。まず、ルイ14世の治世に建設されたヴェルサイユの王立動物園に注目した。この施設は宮廷における壮大なスペクタクルの一部であり、ペローなどの同時代人によって証言が残されている。同時にそこから提供される動物の身体は学者たちに提供され、科学的知識の深化に貢献した。さらに宮廷では、動物をかたどった装飾品や芸術作品に加え、犬や猫、猿、鳥といった小型の愛玩動物たちが人々の生活を彩っていた。女性たちの書簡には、身近な動物たちへの愛情や感情移入が生き生きと綴られている。パラティーヌ妃の書簡からは、彼女が多くの子犬たちと暮らし、1匹ずつに名前をつけ、その個別性を見出していたこと、そしてそれらとの感情的交流を重視していたことが

うかがえる。またセヴィニエ夫人の書簡における犬の様子の子細な描写からも、動物への強い関心が見出せる。これらの記録は、動物を画一的な存在としてではなく、名前や個別の感情を持った対象として愛情を注ぐ当時の人々の感覚を映し出している。そしてこのような愛玩動物の記録はドーノワ夫人の作品に描かれる動物とも響き合い、それを理解する上で重要な要素であることが確認できた。思想的文脈では、当時の潮流としてデカルトの機械論と、それに対抗する反機械論の広がりがあった。動物機械論では、動物を理性も感情も持たない一種の自動機械と捉えた。しかし学者のクロード・ペローは解剖を通じて動物の個別性と感情を認め、画家のシャルル・ル・ブランは人間と動物の相関関係を積極的に論じた。またパラティース妃やセヴィニエ夫人の書簡には機械論への違和感や揶揄が散見され、彼女たちの動物観がデカルト的思考に抵抗する様子が示される。さらにドーノワ夫人と同時代に活動していたラ・フォンテーヌは『寓話』の中で明確に機械論を攻撃し、動物に一定の知性を認めていた。このように、ヴェルサイユの動物園や愛玩動物、そして反機械論的思想などの事例を提示し、宮廷社会には動物を単なる機械とみなし人間と切り離すのではなく、そこに感情や知性を認める傾向があったことが確認できた。そして動物を感情や精神を備えた人間と近い存在であるとみなすこのような意識は、ドーノワ夫人の作品における動物への共感的な視点の背景となっていた可能性を示した。

第3章では、ドーノワ夫人の作品における動物表象を具体的に分析した。分析では、まず作品中に登場する動物を大きく3つに分類した。すなわち、先行研究が提示してきた主人公が変身した姿として現れる主人公としての動物と彼らの冒険を助ける援助者としての動物、そして今回本論が新たに指摘する背景としての動物である。本章ではこの三類型に基づいて作中の動物を分析し、それぞれの特徴と社会背景との関係を検討した。主人公としての動物は、主に妖精の魔法によって動物に変身した人間や妖精のことを指し、その描写には否定的側面と肯定的側面が確認できた。否定的側面については、「イノシシ王子」「バビオル」では、主人公の動物性そのものが矯正の対象とみなされることや愛の成就を阻むこと、あるいは人間界からの排除に結びつくことが示され、「白い猫」「羊」「青い鳥」では人間界での統治権の喪失につながり、さらに「青い鳥」「森の牝鹿」においては動物状態への変身が生命の危機を招くことが明らかになった。動物状態に置かれた主人公たちは人間社会で居場所を失い、社会的地位や生命を脅かされるのである。一方で、動物への変身は常に否定的な結果を招くだけではない。動物状態は時に主人公の境遇を好転させる契機にもなり、その肯定的側面も確認された。「青い鳥」「イルカ」「森の牝鹿」「白い猫」の主人公たちは、人間の姿では自由が制限されているところを動物に変身することで愛を成就させる。また「イノシシ王子」「鳩になった王子と王女」では、主人公たちは動物状態を肯定的に受け入れ、さらに自然状態の優位や人間社会の野蛮性に言及することで、動物の地位が相対的に高められている。このように、動物性は常に否定的に描かれるのではなく主人公たちにある種の解放をもたらし、物語を進展させる原動力ともなるのである。さらにこの動物性への評価の二重性に加え、人間と動物の境界を曖昧にする混淆的な表現も主人公としての動物の特徴の一つである。「青い鳥」「小さなやさしいねずみ」では変身の描写において人体と動物の各部位が対応して描かれ、「森の牝鹿」「イノシシ王子」では人間性と動物性の揺らぎや葛藤が示される。さらに「ロゼット姫」では人間と動物の交配が示唆され、「白い猫」「羊」では動物が人間のように振る舞う動物の宮廷が描かれる。人間と動物は連続的に表され、その境界は揺らいでいる。以上のように、主人公としての動物は否定と肯定の二重性を帯び、人間と動物は明確に分断されない。このような特徴は第2章で確認した同時代の動物観を反映していると考えられる。援助者としての動物は人間や妖精の変身した姿ではなく、彼らと共に行動する

ドーノワ夫人の作品における動物について

純粋な動物を指す。この種の動物の特徴は大きく2つに分類できる。すなわち動物の「エスプリ」に注目したものと、主人公と親密な関係を築き、実際の習性や愛玩動物としての愛らしさが強調されるものである。「金髪の美女」では主人公は旅の道中、その冒険を援助する動物たちの「エスプリ」を称賛する。一方「金髪の美女」「ロゼット姫」では主人公と動物の感情的交流やその動物の現実的な習性の描写に焦点が当たっている。前者からは「エスプリ」に言及することで当時の機械論を想起させ動物に知性を認める立場を、後者からは宮廷女性たちの手記に見られる愛玩動物の姿を読み取ることができる。このように、援助者としての動物は思想的文脈と愛玩動物文化を背景に持ち、17世紀後半の文化的文脈を反映している可能性を示した。背景としての動物はドーノワ夫人の作品中に散見される仔細な描写を伴う動物を指す。これは「白い猫」における犬種や「グラシウーズとペルシネ」における鳥類の羅列、「バビオル」における猿の行動描写など、動物の種類多様さや外見・行動の細部に注目する形で現れる。こうした描写はドーノワ夫人の作品中ではわずかな分量ではあるが、当時高まっていた動物の多様性や生態への関心と結びつく可能性があることを指摘した。以上のように、主人公・援助者・背景という三類型に基づく分析を通じて、ドーノワ夫人の動物表象が17世紀の宮廷文化や思想的背景を多様に反映していることが確認された。

結論として、ドーノワ夫人の作品における動物表象は、従来の研究で指摘されてきた伝統的な象徴性や主人公たちの精神を反映する役割あるいは物語の機能としてのみ存在するのではなく、作者の生きた世界と深く結びついている点を改めて示した。ドーノワ夫人に関する記録は十分とはいえず、彼女がどのような意図を持っていたのか、あるいは動物とどのような関わりを持っていたのかという事実を知ることは困難である。しかしその動物表象には、同時代人々の心象や実際の動物の面影を見ることができる。ドーノワ夫人の動物表象は記号としての役割にとどまらず、17世紀後半の宮廷社会を映し出すものであった。